普門南遺跡発掘調査地元説明会資料

令和4年（2022年）2月5日（土）／公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

遺跡の概要と調査の概要

遺跡の概要　普門南遺跡は、真野川下流域、左岸の微高地上に位置します。真野川下流域には、左岸に曼荼羅山古墳群、右岸には春日山古墳群など、多くの古墳が築造された地域として知られており、遺跡が立地する左岸の曼荼羅山の尾根上には、全長約80mの前方後円墳である和邇大塚山古墳をはじめ、後期には100基以上もの古墳が築造されました。また古代から中世における真野川の河口は、現在よりも大きく内陸側に入り込んで入江を成しており、平安時代には「真野の入江」と呼ばれ、かつてこの地に港が存在していたといわれています。そのような歴史的環境にあった普門南遺跡では、昭和60年に発掘調査が行われ、古墳時代や平安時代の集落が発見され、特に古墳時代の集落は曼荼羅山古墳群との関係を考えるためのひとつのヒントとなりました。

調査の概要　公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県文化スポーツ部文化財保護課および滋賀県道路公社からの依頼により、一般国道477号線(大津側)4車線化工事に先立って令和2年度から発掘調査を行いました。

昨年度は、大野遺跡、普門南遺跡の範囲内で調査を実施し、古墳時代中期から後期（約1,600～1,700年前）、さらに平安時代（約900年前）の集落を発見することができました。そして今年度は、普門南遺跡の範囲で調査を実施しましたので、昨年度の成果も合わせて、発掘調査でわかったことを紹介いたします。

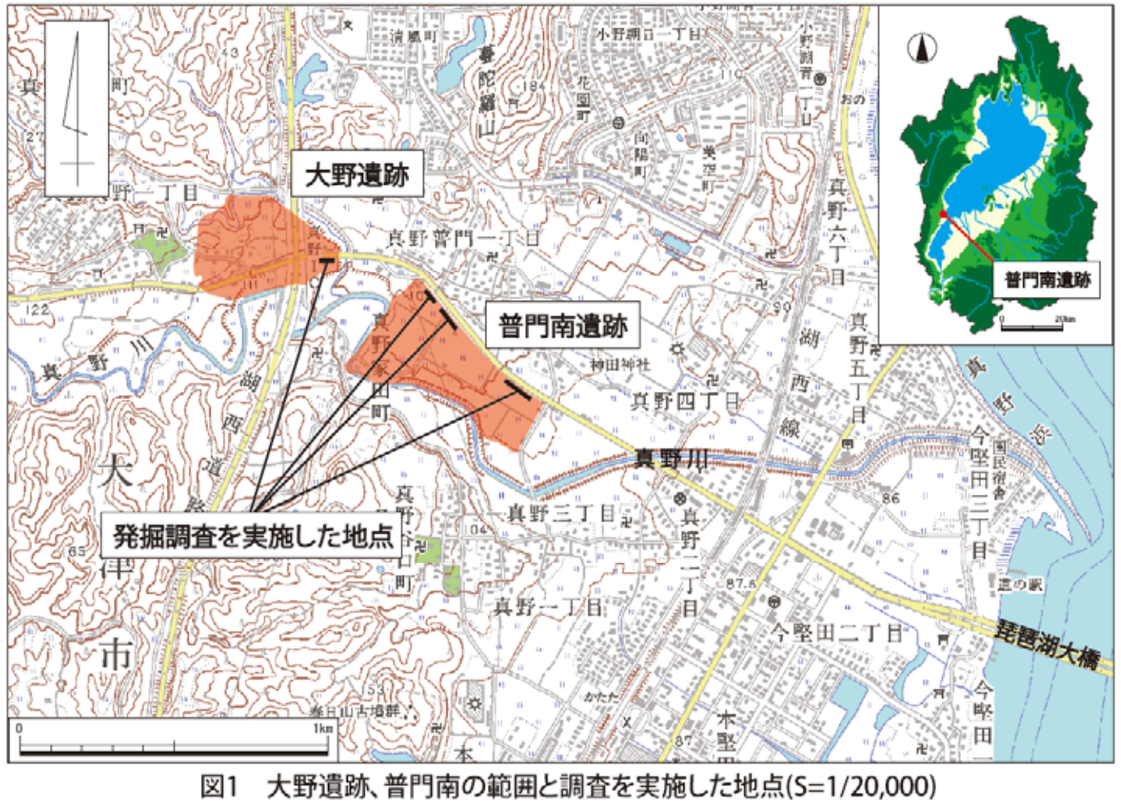


図1　大野遺跡、普門南の範囲と調査を実施した地点(S=1/20,000)

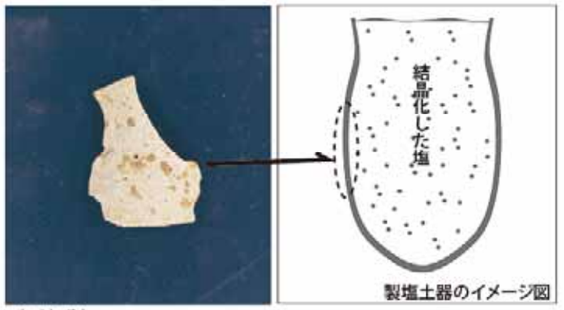
出土した遺物

大野遺跡、普門南遺跡では、古墳時代の土師器・須恵器をはじめとして、平安時代の土師器など、一般的な集落に見られる遺物に加えて、あまり見かけない特殊な遺物も見られました。

竪穴建物S1出土土器　古墳時代前期の竪穴建物から大きな壺や甕（煮炊きに使う器）や高杯（盛り付けに使う器）などが、多数出土しました。中にはほぼ完全な状態で残っているものもありました。

焼けひずんだ須恵器　古墳時代中期から後期の川からは多数の土器が出土し、中には焼成に失敗した須恵器も見つかっています。窯焼きの際に、何らかの原因で形がひずんでしまったものなどです。このような不良品が出土した理由については、ムラが生産地＝窯に近い立地であったことが挙げられます。そして窯で生産された須恵器が、このムラに集められ、選別などの作業が行われた可能性があります。

下駄　古墳時代の川から木製の下駄が出土しました。全長14cmの大きさで、現代の成人の大きさと比較すると小ぶりなものです。稲作時に使用する田下駄ではなく履物としての下駄で、古墳時代前期に登場し、後期には急速に普及していったといわれています。今回出土したものも、おそらく普及が拡大した頃のものと考えらえます。



製塩土器　厚さ１㎜の非常に薄手の土器片が出土しました。これは古墳時代後期の「製塩土器」といい、この器に海水を入れ煮沸させて塩を作ったものです。もちろん海と全く接していない滋賀県で作られたものではなく、福井県の若狭地方など、同時期に製塩が活発に行われていた地域から交易などでこの地にもたらされたものと考えられます。

発掘調査でわかったこと

①古墳時代前期には、調査地の琵琶湖寄りでムラが営まれていました。
②古墳時代中期から後期になると、少しずつムラが真野川の上流寄りに移動していきます。
③古墳時代中～後期の川から、焼成不良の須恵器が出土したことから、付近の須恵器窯で作られた製品がこの地に集められ、選別する作業が行われていた可能性があります。
④さらにその時期のムラでは、若狭地方の製塩土器が出土していることから、広く交易を行っていたと考えられます。
⑤古墳時代が終わると、あまり遺構・遺物が見られなくなり、平安時代に再びムラが営まれます。

今回の調査では、古墳時代を中心にこの地に住んだ人々の生活の一端を知ることができました。今後、この遺跡についてさらなる検討を重ね、この地の歴史を解き明かしていきたいと思っています。

発見された主な遺構

今回の発掘調査では、古墳時代と平安時代のムラを発見しました。特に注目されるのは古墳時代の遺構です。古墳時代では、大きく前期から後期（約1,500年前～約1,700年前）の遺構を発見し、前期（約1,700年前）・後期（約1,500年前）では竪穴建物が見つかりました。

前期(約1,700年前)の遺構は、琵琶湖寄りの調査区の南東部のみで見つかり、その後遺構はさらに北西の地点に展開していくことから、ムラは時を経て、少しずつ真野川上流寄りへと移動していった様子がうかがえます。見つかった川からは、古墳時代中期から後期（約1,500～1,600年前）の多数の土器が出土していることに加え、中には焼成不良の須恵器も出土しています。曼荼羅山が形成する丘陵の東部には、唐臼山古窯跡、知原古窯跡といった須恵器窯の存在が知られています。普門南遺跡で出土した焼成不良品は、これらの須恵器窯と関係があったことを示しているのかもしれません。

古墳時代後期（約1,500年前）のムラを最後に、普門南遺跡では遺物・遺構があまり見られない時代が続きます。再びこの遺跡にムラが現れるのは、平安時代（今から約900年前）で、掘立柱建物や、溝・川などが見つかりました。

平安時代（約900年前）の主な遺構

2棟並んでみつかった掘立柱建物

小穴に埋められた土師器皿

平安時代の掘立柱建物は、2棟並んで発見できました。また、その近隣で見つかった直径30cmほどの小穴から、ほぼ完形の土師器皿が３枚重なって出土しました。これは意図的に埋められ、地鎮の祭りを行ったものと考えられます。さらにその付近の小穴からは中国から輸入された白磁の小壺が出土していることから、集落の有力層の存在がうかがわれます。

小穴から出土した白磁小壺

古墳時代（約1,500～1,700年前）の主な遺構

前期の竪穴建物S1

中期～後期の川

古墳時代の遺構として、前期は竪穴建物が２棟、後期は竪穴建物が４棟（大野遺跡でみつかった１棟を含む）に加えて中期から後期の川を発見しました。前期の竪穴建物S１は、一辺4.5mの正方形で、床面から甕や高杯など、完形品に近い土器が多数出土しました。中心部に熱を受けた小穴があったことから、火を起こして煮炊きを行う炉があったと考えられます。川は、最大幅は20m以上を測り、最終的には真野川へつながっていたと考えられます。川からは、多数の土器に加えて、焼成に失敗した不良品の須恵器、下駄などの木製品が出土しました。

図２　普門南遺跡で見つかった主な遺構の配置図（S=1/1,500）